

# Weekly Michael's News

<今週の聖句>

2016年6月28日発行 No.6

「このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、畏れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。

(ヘブライ人への手紙 第12章28節)

<オープンキャンパスで高校生がチャペルを訪問!! …そこには意外な出会いが!?!>

先日チャペルには珍しい、元気なお客様をお迎えしました。四条畷高校2年生約15名がオープンキャンパスでKIUチャペルを見に来てくれたのです!! 白いシャツにお揃いのネクタイを締めた元気な高校生御一行は、初めてのキリスト教、初めてのチャペル、そして初めてのパイプオルガンの演奏に目を丸くしていました!! 再来年の春にぜひ再会したいですね!! (^o^)/”



オルガン演奏の迫りに驚き!!



「おおーっ!!響きがヤバいですね!!」



パイプオルガンの演奏希望も

<休日のチャペルに響く癒しの歌声…。熊本地震支援チャリティーコンサートが開催!!>

先週末、日曜の午後にKIUチャペルを会場として熊本地震支援チャリティーコンサートが行われました。休日にもかかわらず約50名の参加者が与えられ、演奏者としてお迎えしたVocal Ensembles TWILIGHT BELLSの皆さんの歌声が本当に素晴らしく、1時間半があっという間に感じるほどでした!! 地震発生から2カ月以上が過ぎた現在でも、家族を失った悲しみや、先行きの見えない不安・不自由の中での生活を強いられている方々が多くおられます。そんな方々の抱える苦しみを覚えながら聴いた「ふるさと」(作詞: 小山薫堂)は、心を穏やかに包んでくれるような優しさに満ち溢れていました。次回、12月の公演もぜひ楽しみにしています!!



活躍するボランティア学生の姿も



藤倉先生の開会挨拶



この響きを紙面で伝えたい…涙

<先週のメッセージ> ※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

6月20日(月) 前田 次郎(八代学院 理事長) テーマ:「むなしいものに仕える愚かさ」

3,11以降、私たちの生活の中で身近になった言葉の一つに「想定外」がある。原子力発電において「かもしれない」という危険性は拭い切れない。にもかかわらず「有り得ない」と何度も心の中で言い聞かせていると、それは偶像化する。聖書は、この「偶像」という言葉と行為を最も忌み嫌う。この「偶像」が人間の生きる道を外的外れなものに追い込んでしまう。今一度、我々が共同体として生きていくための秩序である「十戒」を心して読みたい。今の時代、自分の幸せだけを望むのではなく、皆と連帯しながら得られる幸せを大切にしながら、共に歩みたい。

6月21日(火)は、音楽礼拝を行い、多くの出席者と共に聖歌196番のアレンジに耳を傾けました。次回は6月28日(火)で、ついに聖歌隊の礼拝デビューです!! ぜひ皆さん、友人や知り合いをお誘い合わせの上、挙ってご参加ください!!

6月22日(水) 野間 光顕(チャプレン) テーマ:「石の叫び」

日報に、今週から「沖縄週間の祈り」が加わった。前任校で沖縄の歴史と文化を学んだ私にとって、沖縄は特別な場所である。常夏の楽園…のような沖縄は、一方で先の大戦中、実際に武器を持った軍隊がぶつかり合い、それに多くの市民が巻き添えになる「地上戦」が行われた。同時に本当の意味で沖縄の被害を大きくしたのは、「もし米兵に捕まったら潔く死を選ぶように」という当時の教育であった。今も様々な問題に揺れ、苦悩する沖縄だが、この世界が、本当に命を大切にできるようになる為にも、私たちは沖縄にしっかりと目を向け、心を合わせて祈りたい。

6月23日(木) 寛 裕樹(経済学部2回生) テーマ:「卒業して10年…。そして、これから」

大学を卒業し、関東で2年間の店舗業務を経た後、関西に帰省し介護の仕事を目指した。介護の基本を学び、ヘルパー等の資格も取得したが、いざ現場に立つと、一人ひとりの対応に違いがあり、特に『パーソンセンタードケア』の重要性に気付いた。これはKIUの建学の精神ともリンクしているように思う。その後も介護職から医療職である理学療法士を目指し、もう一度学ぶ決意を抱いた時、KIUとの不思議な繋がりを発見し、そこに見えない導きがある事を感じた。今は再入学し2年目、学びの多い毎日を過ごしながら、「人生は経験という名の修業」である事を思う。その一つひとつに神の守りがある事を信じて歩いていきたい。



6月24日(金) 東 弘彦(事務局長) テーマ:「ヤベツの祈り」

ヤベツは神様に勝手な願いをしたら、それを聞き入れられた(歴代誌上4:9-10)。この聖書の箇所を読んだある宣教師がそんなことがあるだろうかと思いつつも、ヤベツのように祈ると、彼の前にキリスト教の話を聞きたいという人がたくさん集まり、その体験から『ヤベツの祈り』という本を書いた。私はそれを読み、本当だろうかと思いつつも、神様の役に立てるようにもっと仕事をくださいと祈ったが、特に変わったことはなく、ここ数年は自分に不得手な仕事が多かった。しかし最近、自分には不得手でも神様が必要とされている仕事をやらされているのではないかと、私の『ヤベツの祈り』も聞き入れられているのではないかと思うようになった。祈りは自分の思いとは違うかもしれないけれど、何らかの形で聞かれていると思う。

(文責:野間光顕)